白山／境川・大畠谷右俣

メンバー：三井（L、記録）、白土
遡行日：09年8月22日～23日

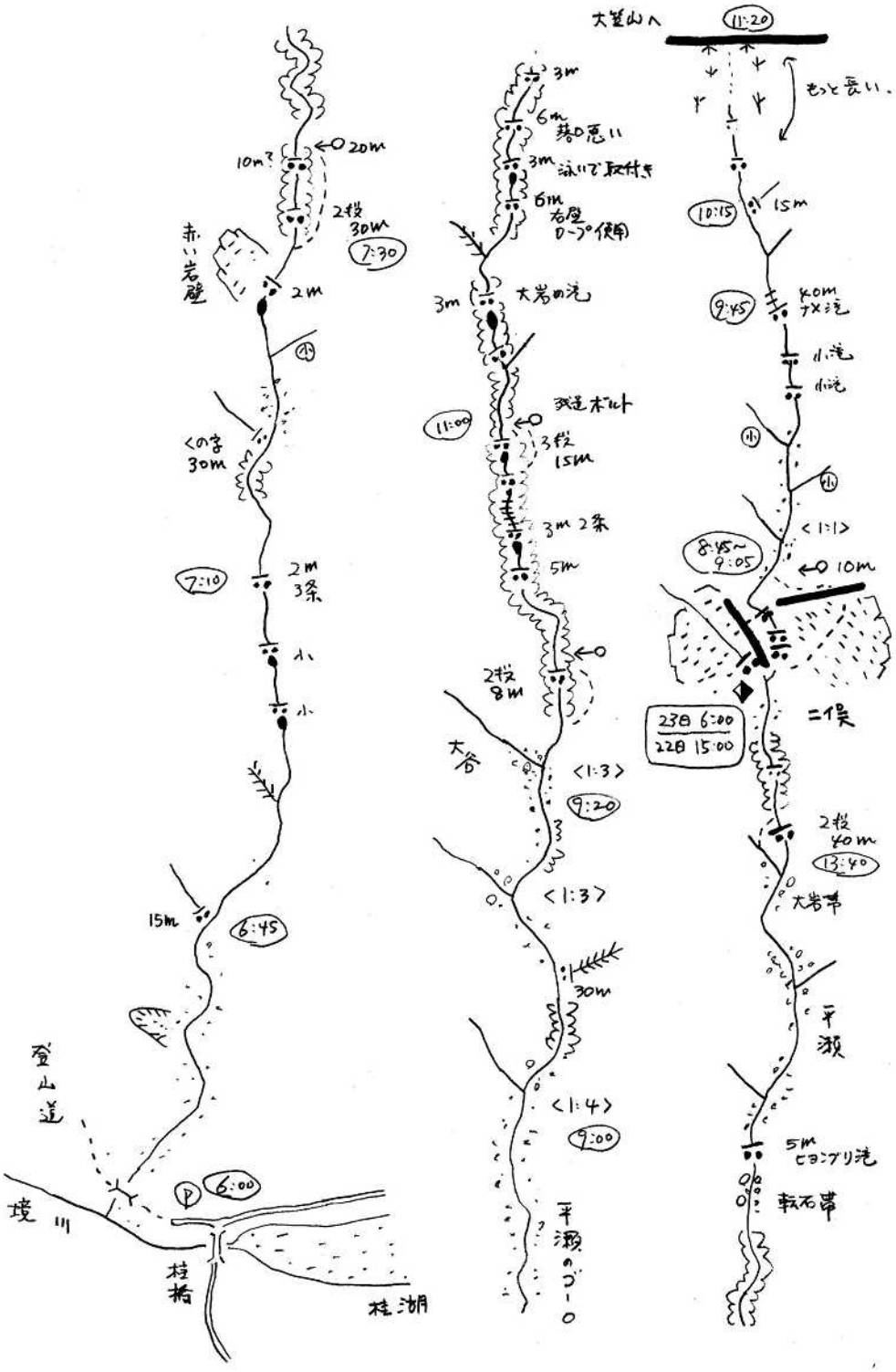
大畠谷（オバタキタンと読む）は白山を代表する秀渓であり、難渓としても知られ、「百名谷」にも選定されている。
以前から行く機会を狙っていたが計画の都度天気やら他の事情で果たせず、今回漸く、白土君を相棒にして実行の運びとなった。

大畠谷は丁度石川、富山、岐阜の三県が接する辺りに位置するのでちょっとアプローチが大変だが東名、東海環状、東海北陸道と高速道を乗り継いで行けばそれ程苦にはならない。（それに今は何と言っても片道１０００円だしね。）
「五箇山ＩＣ」で高速を降りれば目的地は近い。境川ダムのダム湖である桂湖に向かう。
その桂湖の湖畔に整備された公園があって仮泊するには好都合だ。
殆ど渋滞にも遭わず、深夜２時にその公園に到着、車の後部座席を倒して仮眠に入る。
［第一日目］
一番気がかりだった天気も今回の山行では問題ないようで何よりだ。
朝食とパッキングを済ませ、車を桂橋の手前に移動させるといよいよ遡行がスタートする。
目の前に吊橋が架かっていて大畠谷の出合となっている。吊橋の少し手前に谷に下りる踏み跡があるのだがそれに気づかず余計な手間をかけてしまった。
大畠谷に入るが何の変哲もない河原となっていて水量も少ない。（過去の記録では伏流になっている、という記録もあるので通常より水量は幾らか多いのかも知れない。）
拍子抜けするような平凡な沢が暫く続くが勿論これはこの沢の本来の姿ではない。それがいつ豹変するのだろうか。
小滝を数本越え、右岸に赤い岩壁を見る。この間そんなタイトルの映画（レッドクリフだ。）を見たなぁ、なんて思っていると突然、２段 30mと称される滝が出現する。「いよいよお出ましか。」
垂壁の間から水量豊富に落下していて堂々としたものだ。偵察してみるがここはセオリーに従って左岸から巻きに入るのが無難なようだ。
左岸に取り付き高巻いていくが意外に手間取り、落ち口を越えた辺りで下降し始めるが、その先にも滝があるので更に巻き上がり、20mの懸垂で沢床に戻る。
その後は再び平凡な沢に戻り、平瀬のゴーロとなっている。
大谷の出合いを過ぎると再び両岸が立ってきてゴルジュの様相を見せる。
２段（３段？）の滝は丁度落ち口を左から回り込んで越えるのだがちょっと微妙な感じ。迷ったが無理せず左岸から巻く。
3段15mの滝は左岸のザレた草付きを巻くが壁に錆びたボルトがありそれを使って懸垂。
ゴルジュ帯が続いていて滝も混じるが予想したほど険悪で困難なものはない。6mの滝は右壁を登るが中間のホールドが細かくてヌメっている。脆いリスにハーケンを埋め、スリングに足を掛けてズリ上がるが上のホールドを掴んだ瞬間そのハーケンが抜け一瞬ヒヤっとする。
その上の小滝は釜を泳ぐようにへつり、這い上がる。滝はさらに続き、６m滝は瀑水のすぐ右を登るが落ち口に抜けるところがやや被り気味で細いブッシュにランニングを取って抜ける。
次々と滝は現れるがそう困難なものはないが一手、一歩に油断ならないものが多い。それを何とかしながら通過していくのが何とも面白い。「これだから沢は止められん。」
ゴルジュ帯を抜けると平瀬の河原が続く。ゴルジュと平瀬が交互に現れるので気分的には

楽だ。
大岩帯を過ぎると２段 40mの大滝が現れる。左岸からの巻きが楽そうだが沢が左折しているので大高巻きになる。右岸はうまくリッジが繋がっているか判らない。しかし、ここは右岸だろう。
手前のルンゼから巻き始めるとあっさりと落ち口にでた。
ゴルジュを進んで行くとコルジュの狭い空間の間に岩壁の間を滑り落ちる大滝が目に入る。
「二俣か。」
白土君に合図をする。彼も「二俣ですか。」と目を輝かせる。
ゴルジュは進むにつれ序々に開いていき、目の前の岩壁が舞台の幕が左右に開くように広がっていく。
はやる気持ちを抑えゴルジュを抜けると目の前に巨大なスケールの岩の大伽藍が姿を現した。
180 度の半円状に広がった岩壁の少し左から白い岩盤を滑るように巨大な滝が落ちているのが落差 150mの左俣の大滝だ。
右にはゴルジュの連瀑となって右俣が合わさっているのだがリッジに遮られ全容は望めない。
「こりゃすごい。」「すごいですねぇ。」
お互いこんな言葉しかでない。呆然として眺めるほかはない。
10 年ほど前に行った早出川のガンガラシバナと良く似た光景だがいずれにしても一見の価値のある光景ではある。
ザックを降ろすと偵察に行ってみる。ゴルジュの入り口から少し中に入り記録にある滝の様子を確認する。ゴルジュから右上に広がる広大な岩壁はルートをどう取るかよく判らない。マー、明日取り付いてみればわかるだろう。
ゴルジュの手前は小広い河原となっていて恐らくお盆に入山したパーティーのものだろう。整地された場所があり、焚き火跡もある。ご丁寧に燃やし残した流木もそのまま残っていて言う事なしだ。
焚き火はすぐに燃え上がり、とりあえずの乾杯（白土君はコーヒーだったが。）でここまでのお互いの健闘をねぎらう。
「こんな所で泊まれるなんてすごいですね。」と白土君は言うが確かにいい思い出になる。
岩壁に囲まれて一夜の夢を結ぶ。
［二日目］
稜線に上がるのは何時になるだろうか。いずれにしても早めにテン場をでるにこした事はない。
さて、問題の大スラブ壁だが…。
通常はゴルジュに入り、２本ほど滝を越えたところで左岸からそのスラブ壁に取り付いているようだが僕たちは最初からスラブ壁に取り付くことにした。
ごく容易な壁を 5mほど登り、左にトラバースして顕著な凹角に入り、10mほど直上、そこからスラブ壁に取り付く。
スケールは大きいが技術的なグレードは記録にあるように３級程度のものだ。が、同時にこれも記されている事だが岩がもろい。
足元には剥がれた石が堆積しているし触れるホールドはグラグラと浮いている。ピンを打つにもリスはあるがどれもピンを打つと広がってしまう。
難しいピッチはないが終了点から取り付きまで一気に落ちているので気は抜けない。
慎重にロープを延ばし４ピッチ（沢床からだと５ピッチになるのかな。）
潅木帯に達してセルフをとると一安心だ。見下ろすと右俣のゴルジュが滝を落としながら蛇行しているさまが良く見える。
潅木帯に沿うようにトラバースし潅木の生えた枝尾根を下り 10mほどの懸垂で沢床に降りる。
ヤレヤレ終了だ。取り付きから丁度２時間だった。あとは稜線までか…。
沢は細いものとなり、水量も減ってくる。最

後を飾るような 40mのナメ滝が現れると源頭。
忠実に沢筋を詰めて行くが間もなく水が涸れ、窪状になって藪漕ぎになる。
スズタケと潅木の混じった斜面をもがくように漕いでいくと間もなく稜線に上がった。満足感にひたる。「さて、下ろうか。」
稜線に上がればすぐ下山できると思って軽量化の為に下山用のズックも省いたのだがしかし、稜線の先を見ると下山路のある大笠山は意外に遠くて高い。
稜線についている登山道も、所々に木道や丸太で階段が作られたりしているのだが、今は放置されて廃道化しつつあるのか、道の両側からのボサが酷く藪漕ぎ状態となっている。
こんな状況で、渓流タビで歩くのも中々辛いものがある。徐々にスタミナをロスしていく。
大笠山の分岐に着き、あとは尾根を下るだけだ、と思ったのだが…。
フカバラ尾根は途中で何度となく登り返しがあって素直に高度を下げない。（相模尾根のミニ版か。）
下山道は逆落としで一気に下るものがいいね。登り返しのあるヤツはどうも性に合わない。
かなりヨレヨレ状態で車にたどり着き山行を終える。
行きと同じルートを逆に走って帰途に着く。
東海北陸道は所々渋滞していたが何度かこの道は走っているが渋滞していた事は無かったのでこれも１０００円の影響という事だろう。

「大畠谷」は勿論、易しい沢ではないが巷間言われる程困難な沢でもない、というのが僕の感想だ。しかし、「百名谷」に選ばれるだけの内容は持っていて充実した沢登りを楽しめる事は間違いない。
特に二俣の大スラブ壁は以前発行された「日本の秘境」という本に紹介されていたガ、確かに一見の価値がある。チャンスがあれば是非行って見られる事をお勧めする。



09年 8月22日~23日
白山/境川・大島谷右俣